

自己紹介 & オリジナリティー

堀田 修 (ほった おさむ)

1973 年 8 月 7 日 千葉県八千代市生まれ

父が自動車整備業を営み、幼い頃より機械や乗り物に慣れ親しむ。16 歳でバイクに出会い、原付バイクで砂浜を走りオフロードの楽しさを知る。千葉大学工学部機械工学科へ入学、バイクサークルに所属し、18 歳で初レース。その後エンデューロやモトクロスへ出場、レース活動を活発化させる。大学卒業後、システムエンジニアとして勤務。国内のクロスカントリーラリーを経験し、1999 年海外ラリーへ初出場。いくつかの海外ラリーの経験を経て、2002 年・2004 年パリダカに出場し完走。2004 年 FIM クロスカントリーラリー世界ランキング 20 位



身長(170cm)、体重(68kg)、血液型(Rh+B)

趣味:オフロードバイク、フリースタイル BMX、整理整頓

特技:バイク・車の整備(3級自動車整備士)、パソコン、工作

職業:システムエンジニア

バイク歴:16 年 (レース歴:14 年)

語学力:英文・英語でのコミュニケーション可能(TOEIC-620)

サラリーマンライダー 見る側からする側へ

特別な才能を持っている訳でもない、妻子を持ち会社勤めをする、ごく一般的な人間です。ただ一つ違う点はラリーへの情熱です。

パリダカに憧れ、いつしか出場し完走を目指したいと思う人は多く潜在します。しかし、特別な人でないと、パリダカでそれを実現できないというイメージが非常に強いのも事実です。これまでパリダカの完走を遂げたのは、レースで活躍するライダー、企業の社長、雑誌関係のライダー、ジャーナリストなど、一般人からみて特別な存在が多かったからです。

僕のような、ごく一般的な人間がパリダカを完走したことはめずらしい事です。サラリーマンとして会社勤めをしながら、パリダカを 2 度も完走した実績は、パリダカに憧れる人たちにとって、大きな励みになりました。

特別な人でなく、ごく普通の人でも(例:この雑誌を読んでいるあなたでも)、パリダカに出場し完走することが十分に実現可能であることを僕が証明しました。パリダカを遠い憧れで終わらせるのではなく、実現可能な目標としてとらえ、ぜひ挑戦して欲しいと思います。

また、パリダカに限ったことではなく、僕のようなごく普通の人間が情熱を燃やし、目標に向かって挑戦を続ける姿を通して、多くの人に、夢や目標、そして挑戦心を伝えたいです。

30 代、まだまだこれから

30 代、仕事に追われたり、家庭に追われたり、マンネリ化したバイク生活に飽きたり、何かと長年の取り組みを止めてしまう事が多い年頃だと思います。また、モータースポーツでも、若手選手が活躍で、30 代のアマチュア選手は活躍の場が無くなり、レースへの情熱を失ってくる頃です。

また、スポーツにおいて、競技人生の終盤と言われる 30 代ですが、それは注目をあびるトップアスリ

ートの話に過ぎません、基本的にスポーツと言うものは年齢を問わず、新しいことを始めることは十分に可能です。もちろん、モータースポーツにおいても例外ではないでしょう。よくある話ですが「あと10年若ければ、やったのにねえ…」という人は、10年後・20年後にも同じ事を言っているでしょう。

豊富な経験と総合力が重要な要素となるラリーレイドでは、30代40代の選手が活躍しています。今は亡きラリーライダー F.メオーニは47歳にしてパリダカ2年連続優勝をなし遂げ、その後も情熱を絶やすことなく挑戦を続けました。トップクラスのライダーの多くが30代・40代です。ラリーレイドの世界では32歳の僕はまだまだ若手です。

僕と同じ世代の人たちが、趣味やスポーツそして夢へ挑戦する動機付けが出来ればと思います。

世界を舞台にする唯一の日本人ラリーライダー

日本でパリダカと世界選手権ラリーを舞台に活躍する唯一の現役ライダーです。知名度こそ低いものの、世界のラリーで培ったノウハウを日本ライダー達に伝えるべく、ホームページから情報を発信や、パリダカ日本事務局のアシスタントを勤めたり、ラリーへ出場する選手へのアドバイスやアシストを行うなど、積極的にラリーの普及活動を行っています。

世界を舞台にした国際ラリーは、言葉の通じなく情報も少ないなど、日本人にとってはハードルが高く、踏み出せない人が多いのが実状です。

ヨーロッパでは一般の人々からもアドベンチャーレースとして知られ、人気を集めるラリーレイド。日本においても、一つのモータースポーツとして普及させたいと考えています。

ラリーでの経験談

パリダカに向け準備を進めているとき、過去のラリーで一緒に走った友人から4年ぶりにメールが届きました、内容は僕のパリダカ参戦のホームページを見つけ、その応援メッセージでした。数日後、再び彼からメールが届きました。パリダカに出たいという内容でした。突然のことで僕も驚きましたが、メールを読むと、いつかはパリダカという思いはあったがあまりにも大きな夢なので胸の内に秘めていたらしいのです。僕のホームページを繰り返し見ているうちに本気でパリダカに出るという気持ちに変わったのです。過去に一緒に走ったラリーで完走を遂げたあと、彼は目標の無い日々が続き落ち込み気味でした。パリダカ出ると決意し自分に目標が出来た時、彼は涙が出るほど嬉しかったと語ってくれました。

また、僕と同じようにパリダカに憧れ情熱を注ぐ友人が居ます。彼も今、僕と同じように儉約生活を続け、色々なトレーニングを積み、パリダカを目指しています。彼はパリダカという目標に向うなかで、多くの困難を乗り越え、様々なチャレンジをしながら、人間を高めたいと言います。パリダカは目標とした時から、数々のチャレンジを繰り返し、多くの経験を積んでいきます。もちろん、パリダカに限ったことではありません。挑戦は、自分自身を磨き、人間を高めていくことになります。

僕自身、ラリーを通じて、非常に大きく成長しています。初ラリーの時、飛行機の乗り方も判らず人に聞いて回りました。言葉が通じず苦勞することも多々ありました。異国の地を走り、全く異なる価値観に触れ、色々な人に会い異文化に接しました。ミスコースして道の無い砂漠の暗闇を走ったとき、道の本質を知りました。パリダカという過酷な環境で肉体的・精神的に極限状態に追い詰められたとき、脳裏にあったのは応援してくれる妻とまだ存在しない子供の姿でした。バイクの改造やホームページ作成、そしてスポンサー活動、様々な挑戦を繰り返してきました。このように企画書を書くとは、数年前では想像すらしませんでした。情熱をもって夢や目標に挑戦することで、人間は大きく変わります。